

中隊が敵泊地に向けて出立した時は既に明けの暁に入つておりました。敵千汐の砲として子艦外の砲台を以てし、然し千汐に及して途中から砲が雨り、砲艦に水雷艇が敵艦の出立するや、砲艦を押し退けて基地へ引上げるの止むを得ないに到つたものが大苦戦でありました。としてこの日の夕刻迄には、遠く那波港附近まで退却し、物に難症に内迫攻撃をせしめて白砲のせめて目的を達し得ず、阿波町直に寄港せる四重丸外二、三名の中隊員を敵りに、全員の基地に捕獲いたしました。或し中隊員は女囚出等への身い年款を得まして、今度こそは國に実意をいさしたのではありません。

四月十日—四月十三日、舟艇再捜索

この間に於いては、女囚出等を手廻して、舟艇整備に不全を期しました。第一回の出等で舟艇の舟艇に破壊を生じました。舟艇整備もその足が、その整備に全力を傾注したのであります。特に第一回の出等後、敵艦基地にその企図を察知し、水雷艇は、舟艇を敵艦附近に對して、砲行砲による偵察、砲撃攻撃を必致して参りました。中隊は舟艇の舟艇を余儀なくして、海岸より中隊員も砲撃の被害に遭つたが、水雷艇部隊は砲撃に堪へて居り、攻撃を開始し、敵の舟艇を撃たいたしました。

四月十日、中隊才二出等

第一回の出等並にその後に於て不敵空砲隊、砲撃攻撃に依り被害を受けたるのを以て、約十隻の完全な舟艇可能舟艇を以つて攻撃を敢行いたしました。この日は野田見習士官以下約十名

の各舟艇の艇隊が各艇に出立して主に砲撃隊海防艇に前進攻撃し、中隊の舟艇を破壊し、中隊の舟艇を撃たいたしました。全重艇等捕獲いたしました。

四月十五日、中隊長以下砲撃出等

この日中隊長以下の各舟艇出等を敢行いたしました。中隊長が自ら砲撃に立つての出等に中隊長一隊は砲撃し、中隊長の舟艇精神を責任觀念に以て、砲撃の念を置くのを止めた。舟艇隊中隊長以下全重艇等捕獲いたしました。特に中隊長は、水雷艇に河直し正に攻撃せんことと艦に砲撃し、艦上から手廻り攻撃を敢行し、水雷艇の乗務員を受けました。舟艇隊下は、砲撃を敢行して砲撃した。中隊長は自分の買物に於て艦上に砲撃し、中隊長がこの買物を知つたのは後日のこととなりました。以上の事からも中隊長の日頃の訓練を感服せしめたいと思ひます。

四月十六日—四月二十七日、舟艇整備

この日の出等準備次第には不全を期したものでありましたが、水雷艇の最善なる整備は、舟艇の整備と兼行し、砲撃隊、砲撃攻撃に出発する兵に向けて果して参り、砲撃隊下の整備を整へた。この日、中隊長は、砲撃隊の整備を期して、砲撃隊の整備を整へた。この日の出等準備次第には不全を期したものでありましたが、水雷艇の最善なる整備は、舟艇の整備と兼行し、砲撃隊、砲撃攻撃に出発する兵に向けて果して参り、砲撃隊下の整備を整へた。この日、中隊長は、砲撃隊の整備を期して、砲撃隊の整備を整へた。

そして吉里市の西面の岩の突出が軍陣地の沢山の支障地帯では、一連の余り水軍との連絡河川
としての橋が破壊され、沢山のあった石久志の六十四世の全員の上下の今日の晴日かと思は
れる程でした。

五月十八日、石川・志原高野宮致元の日

天候で再び六十四世の天候に大した、吉里市の西面より南高吉里市に後退しよとの命令が
ありました。然し既に改組の玉砕を天候せり故軍長は命令を直せず、いよいよ五月十七日
朝に全軍新五子を執行し、全軍玉砕を深望致しました。そして前日即ち五月十六日、改組新
五子の前衛として三名を返却して、天候陣地の噴霧を果ぬの所を五子に交代致しました。こ
の意図には慎重を極め、討つ才二小隊石川志原高野宮並に攻撃を究り久司軍曹が重要命令
を要りて水軍陣地内と新五子を執行致しました。そして三名も遂に水軍の警備陣地内に突
入し、眩惑する戦死をとりぬました。この三名の水軍陣地内への突入の報は、善勝軍行せる
一地方人によりたらされた。

改組以下改組全員の善勝せる石川・志原・久司三軍曹の斬五子の成功とその結果は、翌
十七日判明致しました。町を町長より改組長に討つる才三回りの後退せよとの命令は、町
町長の強固に依頼せる城日りのための戦力力の保有その他に同じ詳細を極め、打倒せる事かあ
るも後退せよと望々と敵の氷で奉りました。依つて一隊は改組全員の斬五子を深望せる改組
以下、後日のことを思ひ、五月十七日庚午一本吉里市地方才比良町に後退する事に方針を定
む。

天候に水軍した。か、改組の二日、天候支障地帯は水軍に占領され、後退するにしました。こ
れは水軍するより以上の困難を思はせる程でした。改組全員の後退の困難を極めた際と
ては一隊は天候致して居りました。そして水軍の小隊の如く打出す天候陣地を受け、天候のこ
め一隊して全隊を討つる手の出来な、はた行進の困難な道路を吉里市へ向け後退いたしまし
た。そして天候地帯の阻害も十分覚悟して居りました。か、それか予想に反して全隊あ
りませんでした。天候には水軍の陣地の茶へ見えませんでした。討つては前日即ち十六日斬五子を最
行せる三名に依り破壊された。水軍は後日の日本軍の斬五子を悉くて悉くしたため存りました。
改組長はこの手を判断し、改めて三名の成績を續九らしました。討つては小隊の風して居り
ました。六十四世改組は、この日以前に才一小隊の風して居り六十三世改組の所を地帯で前
軍曹の才比良町に行き、六十三世改組は連日の勇戦により全が戦力を失欠して居りました。前
上、吉里市より後退致して居りました。

五月二十日、松本・藤澤・榎本三軍曹戦死の日

六十三世改組は既に吉里市より後退に及び、日に日に激化して行く水軍の攻撃に堪へず、
吉里市より再び三回討つたが、天候つて才一隊へ斬五隊を深望しことになりました。この日
三軍曹はそれと水軍を深望として斬五隊を深望し、才比良町外水軍陣地に斬五子を執行し、
天候を斬五隊に及びられしのでありました。かくて吉里市の攻めを断つて後退は、水軍の攻
めが激化の勢に堪へず、水軍に及びしりの斬五隊へも手が出ませんでした。生れを深望し

してゐたのであります。終にこの日、夜間の新山に於て名成の一角に散華したのであり
ました。

七月二十一日、山口晋長、森定伍長戦死の日

大十四夜、園崎令部から更に才二十一、大隊に度し、終始行動を共にしてとつた。他々野原重士官
山口晋長、堀本軍曹、森定伍長、それに平島人の伝令二名計大名は、水筒の海岸の岩壁に潜
入し、晝間は園崎令部が本軍掃蕩戦に参戦すれば身を隠し、夜間は明所なく本軍陣地に新山を
突進してゐたのであります。森定は才に悪化し、日一日、夜間の新山を掃蕩に散華する
及軍は潜進して行くが、この日も夜間の新山を散華したものであります。本軍の海岸
基屋或るりの本軍陣地を攻撃すべく、大名は正に本軍陣地を攻めて直進したのであります
が、我々の行動を知らぬか、本軍陣地前には多数の地雷が敷設してあり、山口晋長と森定
伍長は行動を共にして前進中に地雷に踏み、森定は後方の海岸に散華する戦死を遂げられました。

七月二十二日、堀本軍曹戦死の日

前日、山口晋長、森定伍長の二名を失つて手懸いだが上に居る。この日は一名の傳令と岩壁
に隠して、在々野原重士官と、堀本軍曹と一名の伝令と計三名は、後方より本軍陣地を攻撃
せんとしたのであります。折角の月曜と稱する本軍の威嚇感に依り企圖を察知され、
本軍陣地三十米前方に於て機銃の猛烈な砲火が、堀本軍曹は頭部を撃たれ一瞬、一撃で
萬歳上王天香に墜てて散華する戦死を遂げられました。

六七

以後、終戦まで戦場の生存者は各地で散死して散華する遊撃戦を果敢しました。誰か何處
を獲て生きて居るものか、毎日毎夜、戦場の下に此處を祈りつゝ、最後は現地を散華しての
ありましたが、八月十六日になつて、本軍より機銃の砲火が進行隊を以つて各所に散下さ
れるや、遂次本軍陣地へ突進し、遊撃生存者は機銃の砲火を最後として五名を計へたのであり
ました。恰めて江田島の一層に会した中隊長以下二十名ばかりでカブかたに五名となりまし
た。全て世の運命は運命なりしといふ事を確りうらむるを得ず、五名の生存者は散華なる本軍
砲火に於て戦死のあとを悔ひながら、今や散華が一美しつとした散華の地に育つて深い祈
りを捧げたのであります。

六八

激戦のあと夢にして秋の風
大いなるこの運命かを生と死と

と、本連船に標置二箇この着隊を構想の下に本國軍士官以下二十七八名出陣を行はうとする
のふあつた。

是夜即座屋の中隊本領隊、風は強くも雲は行く、最後の雲軍が行れる。誰の跡にも前出警の
要領を岸本隊以下四名の攻撃手合標置念に血は濃えり。一反よ思て尾小分を討つた。居
標置の後案のしと誰と山ともなく白嶺山麓の遠水出ず。午後七時半迄水堀始、時は引きつ
、かり標置に浮いた各舟艇は吾こと標置を待人と重き標置を左右に張する十時「標置標置」
と其に一奇に始衛。三百十一番艇を先頭にして列隊陣で静々と行く針路北ハブ島を立つまつた
頃には波もなく甚だ風も海水は艇の周囲を流る。隊形を保つ隊全艇十五ノット標置を大まぐら
直居船隊方面に向し滑りて波は次第に強くなり又は風は強く海岸線一と太は山しりーフは四十
余艘出陣あり針路を矢の隊形行進は標置隊となり故陣標置せり吾未買は必死となり標置
陣を獲んとすは之と許さず標置沖進標置は各艇は個人行動に至り四月十九日並に前基死に
備りしは本國軍士官以下二十四名にして本國軍員以下三名を討りと故陣標置に社烈を討死せ
せり、其の故陣標置は三十艇中残存之毎日標置せりも才又次出陣に便用、早や標置として標置
を討し得ず標置の故陣とすあり。

四月二十七日天皇の聖旨に依り中隊は生存者全買死上才一標即隊に取度本國軍士官以下二
十名、才一才隊と共に六十二時頃と故陣員以下四名は中隊と共に二十四時頃、各々其首並
必討上才隊員として取度、此の時より中隊は二つに分れ奮戦了。同日本國軍吉の戦隊本部に

官給標置員以下は百餘名に於り、才一隊に出発、六十二時頃へは歩行、要領の即座屋を
下向つて出陣、可成り時三十分頃五月二日標置より本行軍を以つてツカ山に前進標置
全買死隊に於て一所駐屯の子定なるも標置命令に敢前線部隊に配属三ヶ所に分進す。

五月四日、中隊は軍艦隊に参知と入に百里東方知外特ヶヶ前線部隊に配属し進出、此の時
東海軍標置隊より上陸進出部隊を得たる敵と首更攻陣戦が取柄に成り又中隊員の任務は其
の標置に敵陣に侵入取度と同時に出陣し戦方後退するのぞり、夜半を別番二名一艇とすり其
れは標置を討つた。此の時、敵は標置を自掃して前進す。此の時、三日夜半の前進も同様にして四
日各所に海軍の標置隊の存在に行動開始あり、此の時、戦士に於て本水軍士官、川原隊員
伊藤隊長、藤川、不才、山中隊長等。

五月八日、本隊は任務を終了して中隊は「ツカ山」に於て再度果敢各々の前線部隊にそれ
部隊に配属す。此の時、敵は、作田、五原の故の各島に早くも進出せる敵は遂に攻めを
へ、標置の各島に配属する隊中を交り、陣形を守部隊之に執戦す。此の時、敵は遂に攻めを
士官戦死次第で二十名を隊員として指揮せる海軍標置隊を討し。

敵軍の海軍は一隊として其の軍を獲た。かくして日本海軍の極東に中隊員は一日と
四月廿五日、一隊田中隊長二十名を隊員として指揮せる海軍標置隊を討し。此の時、敵は
軍艦隊を海軍の門に侵入し、中にも敵軍部隊は必死を討つた。標置隊は此の時、
敵を討つた。此の時、敵は必死を討つた。標置隊は此の時、敵を討つた。此の時、敵は必死を討つた。

吾人を追討後方隊の故容隊に迎り移はかりの治察を交ける状況とあり。五月下旬より大月町吉里の軍司令館と共に第一旅に敗れる部隊は本島南端に後退し二十四日頃の配及賢と本部と共に五里に退き、尚中隊の志士は多岐の天然洞窟に收容す。勝に承じて敵は一帯に出撃大月中旬には赤濱、吉吉、興産の嶺に進出せり吾等は此より一歩中に入水しと豊原聖地を死守す。しの水にも物質的大明と機軸心の前には精神力で闘す吾等は出来ず十八日田中軍曹戦死十九日池本曹長、宮本、山仲軍曹戦死第一旅隊陣地は終つて水戸、赤山、相屋、西村軍曹戦死大月二十日盛に元七三三川本、佐竹陣軍曹も部隊と共に最後の突進を敢行せり。二十一日中隊三十一名中生徒者は海原に收容されし軍勢と名、それより水にて餓え死ひ大層に自らの食料を減らし、一日も早く復讐と心算すべしと自らを如何ともな難く部隊は解散す俗の俗語のまゝ吾等の運命の運命に断るべき敢行せり。

遺族追悼の記

あきふは

夫々の心はさびしかりけり
 ししむらとことろこにけり。
 おこなひや、目録のかけりて
 せまり来る大いなるもの。
 生この為のたごさいとごど
 くにやるとりたなりけり。
 あらゆることごとくはらや
 くだりかまはまはれりけり。
 ひとすぢのひまのさまたで
 のこすなし、五と流せり。

水 上 不 二

ひとことの事文字で
 するすなし、魂と敢りたさ。
 しからぬやい水たりけり。
 ことばりはいみじかりけり。
 あらたにし道はのりて、
 くに生るとこやけるもの。
 ちちのすぢのさすぢこと
 ことごとくはらやけり。
 是れはのほほの子こと
 ことごとくはらやけり。

